

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

イタリアそろばんの旅⑧

* あなたには勇気があります *

木下 和真

ヴェローナでの授業以外にも、ベルガモ、ミラノ、ヴェネチア、ボローニャという北イタリア四都市五か所で講演を行った。

その中で最も大変だったのがボローニャだった。イタリア語初心者の私が、約二時間イタリア語での講演。あとでコラードさんに「あなたには勇気があります」と言われたように、度胸だけで乗り切った一日だった。

始まりはローマ文化会館からの一通のメール。ボローニャにある東洋美術研究所がそろばんに興味があるという。

所長のガイディ氏は日本文化の研究者。専門は浮世絵。東洋の数学にも造詣が深い知識人だ。

その後ガイディ氏と直接やり取りを重ねるうち、私は何か勘違いを受けているように思えてきた。最初に違和感を覚えたのはこの文章だった。

—We would be very happy if you could come to Bologna and give a lecture in autumn.

ガイディ氏は I speak some Japanese とのことだが、やりとりはずっと英語だった。引っかけたのは lecture という単語。辞書で確かめると講演・講義と出ている。授業や実演ならまだしも、レクチャーとはたいそうな……。

数日してこのようなメールが来た。

—あなたの講演のために素敵な大ホールを用意しました。

直後に名前が書かれている。

—the Lecture Hall of the Archeological Museum of Bologna (ボローニャ考古学博物館レクチャーホール)

大ホール?? 私はどれほどの講演をするのだろうか? その後には、

—パワーポイントを使用しますか?

コンピューターとはいわずパワーポイント。学者らしい表現だ。実のところ私は講演などしたことがない。パワーポイントなんぞ、使ったことがない。持ってもいない。

メールを閉じ、「ボローニャ考古学博物館」を検索する。ホームページには非常に綺麗な建物が載っている。そして、ガイドブックにも載っていた。こんなところの大ホールとはどのようなものだろうか。絶対にどこぞの大学教授と勘違いしている…不安だけが高まる。

しかし、会場まで用意してもらい、やめてくれというわけにもいかない。講演となると博物館にタダで入れる。ちょっとお得かも! なんて調子のいいことも考える。

するとまた新しいメールが来た。

—あなたの肩書はどうしましょうか? 例えば○大学教授のように。

やはり推測は当たっていた。大学教授と間違っている。映画で指導をしたと伝えたのがいけなかったのだろうか。勘違いされても困る。とりあえず「私は大学教授ではありません。ただのそろばん教師です」と正しておいた。

しかし、なんだか事が大きくなっている。日本イタリア京都館のマルコ先生に相談し、日本で最後のレッスンは原稿作りとあいなった。

そして、イタリアに行った時のことだった。私はコラードさんの自宅に招かれ夕飯を食べていた。

「来週の日曜日、ポローニャで講義をすることになっています」私は告げた。

「あなたを招いたのはガイディさんですか？」コラードさんはガイディ氏を知っているようだ。日本について学んでいる人の中では有名ならしい。「ちょっと見てみましょう」食事が済むとコラードさんはコンピューターを開いた。

「インターネットに出ています」コラードさんが言った。続けて、「あなたは professor になりました。おめでとうございます」

画面には来週の講演会の案内が表示されている。日時が書かれおり、入場無料とある。そして最後に発表者 professor Kinoshita と書かれていた。プロフェッサーとは…

やはり勘違いしている。私は大学の教授などではない……

こうなると、講義を頑張るしかない。

今回のために購入したパワーポイントを駆使し、原稿もぎりぎりまで読み込んだ。



【講演の様子】

いざ本番の日がやってきた。ポローニャまで列車で約二時間。ホームに降り立つ。ポローニャは大きな都市だけあって、降りる人も多い。人波の中を歩いていくと一人の男性に、

「木下さんですか？」

と流暢な日本語で話しかけられた。突然の問いかけに驚きながら、

「はいそうです。ガイディさんですか」と答える。

「このそろばんを見てすぐにわかりました」

と、ガイディさんは大そろばんを指差した。やはり、待ち合わせには最高の武器のようだ。

ガイディ氏は想像以上に日本語がペラペラだった。今までのやりとりがずっと英語だったため、私の方も勘違いしていたようだ。講演までの間は日本語しか話さないで済んだ。

東洋美術研究所は日本関連の本でいっぱいだ。「本居宣長全集」「荻生徂徠全集」などの本が所狭しと並んでいる。

早速私はパワーポイントと発表原稿を見せた。ガイディ氏は私の原稿を丁寧にチェックしてくれた。

せっかくチェックしてもらったにもかかわらず、講演が始まると好き勝手に話したくなるどころが私の悪い癖だ。今回もついつい原稿を見ずに勝手に話し出してしまった。

始めの自己紹介は問題ないが、次第にイタリア語力が話したい気持ちに追いついてこなくなってくる。日頃、子どもを相手に授業をしているので原稿を読むという習慣がないのだが、今はイタリア人の大人相手。原稿を読まなかったことを後悔する。

授業での言い回しを駆使し、どうにかこうにか話すのだが、使ったことの無い単語はやはり出てこない。焦るとさらに出てこない。

例えば、ピアノの「鍵盤」という単語。そろばんの話では必要のない単語のように思えるが、暗算を披露した後に使う。

「もう一度暗算をします。今度は私の手を見てください」

スクリーン上に現れた数字を計算する。今回ははっきりと見えるように空気の上で指を動かす。

「私は何もなくても、そろばん珠をイメージすることができます。それはピアニストのようなものです。ピアニストはピアノがなくても、このようにピアノを弾き、音を聞くことができます」

私は空中でピアノを弾く真似をする。

「Lui può visualizzare una ta…ta…tas…tas…」続けて言いたいのだが、「鍵盤」と言う言葉が出てこない。tas で始まることは分かっているのだけれど続きが出てこない。すると、客席から、

「tastiera!」と、声がかかった。鍵盤の上で指を動かすふりをしながら、tas…tas…と言えば、イタリアの人たちならすぐに私の言いたいことが分かる。

私は「Sì, sì. Grazie!」と、答え、「... può visualizzare una tastiera nella sua mente.(ピアニストは頭の中で鍵盤を視覚化することができます)」と続ける。

「わたしもそろばんの珠を視覚化し、それを動かして計算するのです」

暗算はやはりどこの国で披露しても驚かれる。やはり、そろばんの一番の特徴と言える。

暗算で驚かれると、今度はルート(√)を解いて平方根を求めてみる。この平方根と言う言葉、小学校で使うはずもない。使っていない単語がすんなり出てくるはずもない。ここでも同じことを繰り返す。

「ra...ra...radi...」このように言うと言語が私の言いたいことを想像してくれるようになっていた。

言いたいことと違う言葉なら、「no, no, no.」と首を振る。いくつか単語を言ってもらおうと、あっそれだと思える単語が返ってくる。平方根も三回目くらいで、「radice quadrata」という言葉が返ってきた。

「またもや「Sì, sì. Grazie!」だ。」

こんなことを繰り返して何とか約2時間の講演を終えた。

講演を終えると感謝の意味を込めて、観客の皆さんにそろばんキーホルダーを配る。すると、多くの人から

「complimento!」と言う褒め言葉をいただいた。

ニコニコ笑顔で Grazie! Grazie! と答えていたのだが、実は何を言われているのか全く理解できていなかった。頭によぎったのは「お世辞をいう」という訳だった。英語での訳語一つだが、明らかにおかしい。しかし、変だと思ふ余裕もない。ただ笑うしかない。

するとコラードさんの姿が私の目に入った。午前中に仕事を終え、会場まで駆けつけてくれた。さっそく感想を聞く。「講演はどうでしたか?」「あなたは一人ではなく、みんなで講演をしていました。」イタリア語のたどたどしさから、一方通行

の講演でなく全員参加型の講演になっていたようだ。「けれど、誰ひとり帰らなかった。それは成功です」今回も褒められているのだからどうだか分からなかったが、ほっとした瞬間だった。

皆で夕食を食べ、コラードさんとボローニャ駅からヴェローナへ帰る。帰りの切符を買おうと券売機に向かった瞬間だった。

財布が無い。

最後の最後にとんだハプニングだ。

しかし、改めて考えると、今日は一度もお金を使っていない。行きの切符は前もって購入していたし、食事はすべておごりだった。

そう、講演で頭が一杯で財布を持ってこなかったのだ。コラードさんが一緒にいなければ、帰れないところだった。

コラードさんに列車賃を借り、無事、レジデンスに到着する。すぐさま、昨日のズボンのポケットを確認する。

あった。

大ホールでの晴れの講演、ズボンは洗い立てのものに取り換えたのだが、財布はそのままだったようだ。

財布を握りしめ、講演が終わった時以上にほっと胸をなでおろす。そして、長い一日が終わった。

(当館語学受講生)



【ボローニャ考古学博物館】

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA?
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

イタリア通信

第12回『ファシズムの記憶

—フェッラモンティ強制収容所を訪れて—』

深草 真由子

1945年1月27日、アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所がソ連軍によって解放されたことを記念し、イタリアでも毎年1月末になると、ホロコースト(ナチスによるユダヤ人大量虐殺)の記憶を後世に伝える為に、講演会など様々な企画が催される。筆者も、アレツォからドイツの収容所に送還され、家族を命がけで守る男をベニーニが好演した『ライフ・イズ・ビューティフル』、ヴェルディ事件をテーマにした『黄色い星の子供たち』をテレビで視聴した。そして1月27日当日にはカラブリア州のタルシアという小さな町を訪れ、フェッラモンティ地区にある強制収容所跡地にてセレモニーに参加した。収容所に蔓延していたであろう重苦しい空気と被収容者たちの絶望、そしてやがて平和が訪れ、色とりどりの蝶が空に舞い上がっていく様子をダンスで表現した、地元の小学生グループの発表が素晴らしかった。

フェッラモンティ強制収容所は、第二次世界大戦中、イタリア内務省の管轄下にあった48の収容所のうち最大規模のものであった。1940年6月にイタリアが参戦した直後から、1943年9月に英軍によって解放されるまでの2年以上にわたって運営され、約4千人の人々がここに収容された。もとの生活から強制的に引き離され、有刺鉄線で外界から隔離され、監視されながら彼らが暮らしたこの空間は、99棟のバラックが朽ち果てた後、今では家畜が草を食む原っぱとなり、その真ん中を無慈悲にも高速道路が突っ切っている。収容所跡地にある小さな博物館を、2、3時間もかけて丁寧に案内してくれるスタッフは皆ボランティア。記憶を継承するため、この施設を保存する重要性を認める地元の人々が、財政難に負けず頑張っている。

なぜフェッラモンティに強制収容所が建設されたのか？近くに鉄道があった為、被収容者の連行に便利であったことが一つ。そしてマリアが蔓延し、夏は高温多湿で耐えがたく、雨が続く季節には沼地となる非衛生的な場所であったことがいま一つ。ヒトラーが最初に作った収容所のあるバイエルン州ダッハウも似たような条件だった。普通の人間が健康に生きるに適さない土地が、牢獄としては理想的だったという事だろう。さらに、イタリア半島のつま先に位置するこのカラブリアという地。ユーロスターが走る21世紀になっても、産業の発達した北イタリアや首都のローマからは言うまでもなく、南の大都市ナポリからも遠く、(筆者の気のせいかもしれないが)何となく孤立している印象が拭えないカラブリア。70年前であればなおさらであろう。



【フェッラモンティ強制収容所跡地】

ここに収容されたのは、外国籍あるいは無国籍のユダヤ人、ヨーロッパから追われ、パレスチナへ向かう航海の途中、エーゲ海で難破したユダヤ人、イタリアやユーゴスラビア、ギリシア、コルシカ島の、政治的に危険だと見なされた者たち(反ファシスト)、密売に関わっていたという中国人たちであった。ナチスはドイツやポーランドの収容所でユダヤ人や障害者らを、まるで同じ人間ではないかのように扱い、簡単にその命を奪ったが、イタリアでも、それと同じ思想を土台にして、ユダヤ人の国籍を剥奪し、ファシズム体制に異を唱える者たちを弾圧した。彼らは手錠をかけられた惨めな姿でフェッラモンティ収容所に連れて来られた。一日に三度ある点呼と、軍によるパトロールによって常に行動は監視され、政治について議論する事は禁じられ、自由に新聞や雑誌を読む事も

できない。不潔なバラックでの生活。マラリアやチフスで倒れる者がいる。食料は不足し、栄養失調で動けなくなる者もいる。一本のズッキーニを手に入れるために一週間も待たねばならなかった。町に残した家族や親戚との間で交わしていた手紙の内容は検閲された。外国語で書かれた手紙の場合は翻訳されたうえで検閲されるため、宛先人の手元に届くまでに何ヶ月もかかる。親しい人の身の上を案じる者にとっては、気の遠くなるような時間であったろう。ナチスがユダヤ人を大量虐殺しているという噂は、フェッラモンティにも伝わっていた。「明日はわが身」という恐怖。

だが驚くべきことに、被收容者の大半を占めるユダヤ人たちがこのような過酷な状況の中で、学校や幼稚園、シナゴーク、議会、裁判所、食堂、図書館、クリニックなど運営し、收容所内に小さなコミュニティを作った。各々がもともとの職業や専門知識、特技を生かす形で助け合い、生きて解放された時に「学校の勉強についていけるように」子供たちを教育しあった。絵画や語学のレッスン、コンサートや文学コンクールも開催した。收容されていた音楽家が、所内にあったオルガンを使って作曲した「フェッラモンティのワルツ」は、今年のセレモニーで初披露されたが、悲愴さの感じられない軽快な音楽であった。ユダヤ人たちが、限られた範囲ではあるが自治を確立することに成功したのは、彼らの賢明さとメンタルの強さによるものであると同時に、それを非公式に認めた管理側の寛容さにもあるだろう。カラブリアという地が田舎であった事、つまり中央から距離がある為、ファシズムという大きなシステムの隅にある小さな歯車でしかなく、そのために時代の渦の中に大きく巻き込まれずに済んだからだと考えればよいのだろうか。“エリート”のファシストがフェッラモンティを管理していれば、こうはいかなかっただろう。

ウィーンを追われてイタリアに逃げたユダヤ人 Alice Redlich さんが、息子に語った戦争体験談を聞こう。パスポートの発行を待つ夫と母親をドイツ軍占領下のウィーンに残し、息子とともに先にミラノに入った彼女は、ムツリニーが制定した人種法のために、半年後に出国せねばならないと知る。その間に夫と母を呼びよせて、上海へ向かう

計画を企てたが叶わない。移民局から母に下された帰国命令を取り消すため、一家そろってフェッラモンティ收容所へ入ることを受け入れた。



【ムツリニー 1938 年「人種法」を制定した】

「わたしたちのバラックの前には小さなスペースがあって、お母さんがミラノから持ってきた種や、そのほかにも花や野菜の種を買ってそこに蒔き、畑を作ったの。軍人さんとも仲良くなったわ。彼らは週末に戻った実家から、わたしたちに種や植物を持ってきてくれた。

[...] それから、近くの農民たちがこっそりやって来て、たくさんの食料を売ってくれたのよ。ユダヤ人は闇市よりも良い値段で買ったからね。有刺鉄線があったんだけど、穴を掘って侵入し、卵やトウモロコシ、果物を持ってきたわ。

フェッラモンティに到着してすぐの頃(あなたは3歳になったばかりだったのだけれど)、あなたが友達と外で遊んでいたとき、ジープのような車が走っているのを見たわ。所長が收容所内を乗り回していて、あなたたちを捕まえ、車に乗せて、外へ出て行ったの。私は死ぬほどびっくりして、外

へ走り出て「何て事をするの？」と問いただした。皆は言ったわ、「何をそんなに怒っているんだ」と。「所長がこどもたちを連れて行ったのよ！」「ああ、そうかい。散歩にでも行ったのだろう」。実際にその通りだったのよ、一時間ほどしてから戻ってきたあなたたちは本当に嬉しそうだった。所長があなたたちにジェラートをごちそうしてくれたのよ。劇の上演があった日のこともよく覚えているわ。ちょうど誰かがとっても上手にヒトラーのものまねをしていた時に准尉が到着して…。皆ぎょっとして凍り付いてしまった。でも、その准尉も楽しそうに観劇していたわ」。



【フェッラモンティに収容された子供たち】

1943年9月、収容所は連合軍とドイツ軍との交戦の舞台となった後に解放され、ようやくフェッラモンティの人々は自由の身になった。しかしこの時、北イタリアに暮らすユダヤ人は、ナチスによって絶滅収容所に連行され、殺されていた。フェッラモンティのユダヤ人はたまたまドイツ占領軍の手の及ばないところにいた為に、幸運にも命を救われた。一人の人間の生死が他人の発する sì か no にかかっていたとプリーモ・レーヴィは言っているが、自分の意思とはまったく関係ないところで運命に翻弄されたのは、フェッラモンティの彼らも同じである。あの狂気を二度と繰り返してはならない。筆者もヨーロッパに暮らすアジア人、マイノリ

ティの一人として、差別の芽が芽のうちに摘みとられる社会を願う。

[参考文献]

Carlo Spartaco Capogreco, *Ferramonti. La vita e gli uomini del più grande campo d'internamento fascista (1940-1945)*, Giuntina, Firenze, 1987; Carlo Spartaco Capogreco, *I campi del duce. L'internamento civile nell'Italia fascista (1940-1943)*, Einaudi, Torino, 2004; Francesco Folino, *Ferramonti. Il campo, gli ebrei e gli antifascisti*, Edizioni La Scossa, Roggiano Gravina (CS), 2009.

[参考サイト]

<http://www.museoferramonti.it/>

(元当館スタッフ)

… 会館 だより …

※(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より**公益財団法人 日本イタリア会館**になります。※

イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 梅田：大阪駅前第4ビル
4/3 (水) 11:00~12:30
4/3 (水) 19:00~20:30
4/7 (日) 13:00~14:30



- 京都本校：日本イタリア京都会館
4/2 (火) 11:00~12:30
4/6 (土) 11:00~12:30
4/6 (土) 13:00~14:30

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>